グローバルにいがた＠世界の街

グアム

月曜掲載

一つではない 戦争の真実

山本　優子さん

新潟市西区出身

日本から一番近い米国であるグアムは、西太平洋のミクロネシアと呼ばれるマリアナ諸島の最南端にある島です。日本からは3時間半ほどのフライトで訪れることができます。

佐渡島より小さい島には、「人種のるつぼ」である米国を体現しているかのように、グアムの先住民であるチャモロ人をはじめ、約17万人の多種多様な人々が生活しています。

1年中温暖なグアムは観光地としてのイメージが強いですが、地理的にアジアと北米大陸の間にあり、経済・軍事戦略上、重要な位置を占めています。そのことで、グアムには人々が翻弄（ほんろう）されてきた歴史があることは、あまり知られていないのではないでしょうか。

アデラップ岬にある戦没者を慰霊する鎮魂神社

紀元前からずっと、グアムの先住民の人々は海辺で漁をするなどして、自給自足の穏やかな生活を送っていました。しかし、1521年に、ポルトガル人のマゼランが世界一周の航海中にグアムを発見して上陸したことで、彼らの生活が一変しました。

その後、65年から1944年まで、グアムはスペイン、米国、そして日本によって統治されました。そのたびに人々は戦争に巻き込まれてきました。

そのため、グアムには戦争に関する歴史的な遺跡が多くあります。日本人として、米国側の視点から、戦争という悲惨な歴史を振り返ることもできます。

昨年、太平洋戦争記念館を訪れた際に、しばらくその前から動けなくなった印象深いパネルがありました。そこには、〝We Can Forgive, But We Must Never Forget（許せても、決して忘れてはいけない）〟と記されていました。

戦争という事実を、いろいろな立場や視点から見れば、そこにある真実は一つではないと気付くきっかけとなりました。

新潟のみなさん、リフレッシュとリフレーミング（視点や発想を変えて物事、行動を肯定的に捉えたり探したりすること）をかねて、ぜひ一度グアムを訪れてはいかがでしょう。

（山本さんは新潟市西区出身。2000年から県内の中学校で英語教諭として勤務し、23年からグアム日本人学校に勤務しています）

海外で暮らす本県関係者が現地の様子を紹介します。ウェブサイト新潟日報デジタルプラスにも掲載。執筆希望も受け付けています。